日本うつ病学会

第21回日本うつ病学会総会
ランチョンセミナー7

現地開催

うつ病の薬物療法の理想と現実

-ガイドラインから読み解く抗うつ薬の可能性-

座長 **馬場　元** 先生
順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院 メンタルクリニック 教授

演者 **加藤　正樹** 先生
関西医科大学医学部 精神神経科学講座 主任教授

日時 2024年7月13日（土）12:20～13:20

会場 第1会場（大阪国際交流センター 1F 大ホール）
〒543-0001 大阪市天王寺区上本町8-2-6

- 本セミナーのご参加には第21回日本うつ病学会総会のホームページより参加登録が必要となります。
  以下URLをご確認ください。
  https://www.c-linkage.co.jp/jsmd21/registration.html
- 本セミナーは整理券の配布はございません。直接会場にお越しいただき、先着順にご入場いただきます。

共催：第21回日本うつ病学会 ／ Takeda 武田薬品工業株式会社 ／ Lundbeck ルンドベック・ジャパン株式会社

2024年5月作成

第21回 日本うつ病学会総会
ランチョンセミナー7

うつ病の薬物療法の理想と現実
-ガイドラインから読み解く抗うつ薬の可能性-

加藤 正樹 先生
関西医科大学医学部 精神神経科学講座 主任教授

うつ病は多様な疾患である。その多様性とは、症状や経過の多様性、治療反応の多様性、さらには病期やライフステージの多様性を意味し、これらを適切に認識した診療が望まれている。現在、本邦では9種類の新規抗うつ薬が上市されており、それらの薬理作用も多様である。つまり、多様な症状と各治療期におけるゴールに対して、多様な抗うつ薬の中から最適解を探す作業が必要となってくる。その多様性×多様性の難問に対する最適解への第一歩は症状の定量化による適切な縦断評価、つまりMeasurement Based Care(MBC)、そして、治療期を各フェーズに分け、それぞれのゴールを経て長期的ゴールに到達することである。MBCに用いられる評価尺度は、急性期ではQIDSやPHQ-9、副作用評価、復職準備から復職期、維持期ではWPAIやTHINK IT、パーソナルリカバリーではGAS-Dなどが臨床的に有用であろう。

本大会では新たなうつ病ガイドライン大改訂版が初公表される。この改訂版ガイドラインは“医療利用者と提供者の意思決定を支援するために、システマティックレビューによりエビデンス総体を評価し、益と害のバランスを勘案して、最適と考えられる推奨を提示する文書”というmindsのルールに基づいた、本邦初のうつ病ガイドラインとなる。本講演では、うつ病の多様性を、MBC活用し治療フェーズとゴールという観点に着目し、どのように抗うつ薬の有用性を評価し、有効な薬剤を選択したらよいかを、大改訂版ガイドラインを紐解きながらそのヒントを探ってみたい。